

平成26年度沖縄群島病害虫発生予報第11号(2月予報)

I 2月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	20	20	40
平年並	30	40	30
低い(少ない)	50	40	30

(平成27年1月29日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	17.1	19.8	14.8	119.7	87.1

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 2月の発生予報および防除上の注意事項

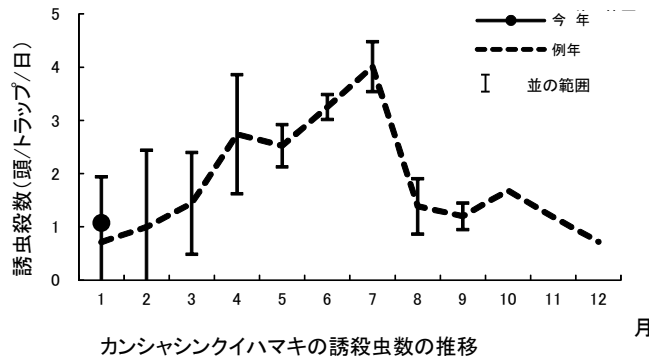
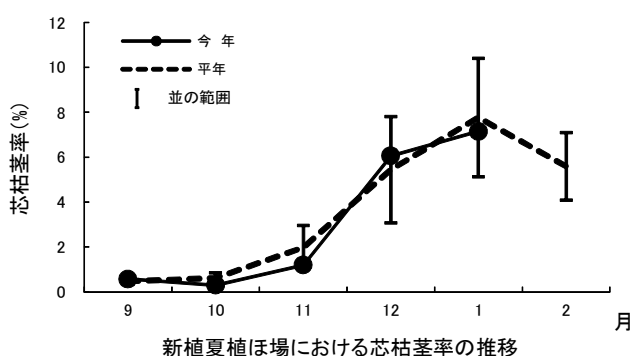
1 さとうきび

(1) カンシャシクイハマキ

発生程度 : 並

予報の根拠

- a 1月下旬の調査の結果、新植夏植ほ場における芯枯茎率は7.1%(前年3.9%、平年7.7%)と平年並であった。
- b 1月のカンシャシクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は1.1頭(前年0.5頭、例年0.7頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

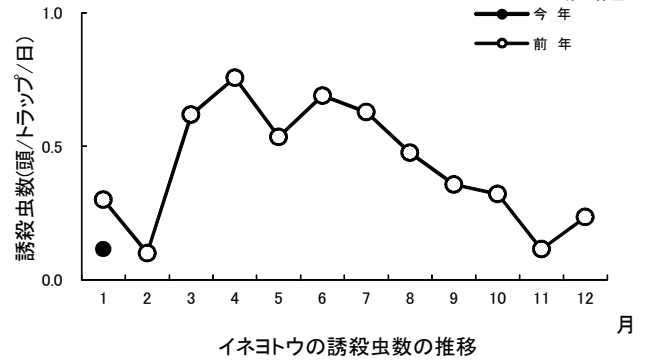
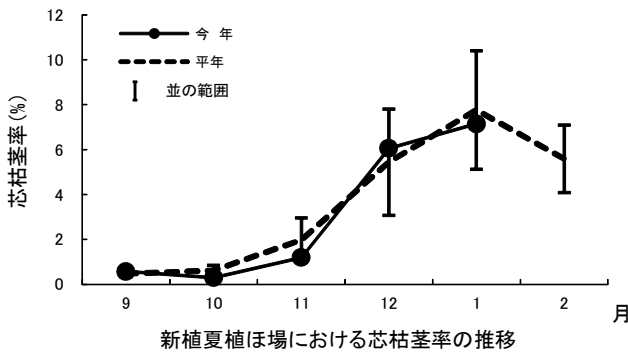
- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- c ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- d 乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- e 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- f 平成24年度病害虫発生予察技術情報第3号参照(平成24年6月11日付)。

(2) イネヨトウ

発生程度 : 並
予報の根拠

a 1月下旬の調査の結果、新植夏植ほ場における芯枯茎率は7.1%(前年3.9%、平年7.7%)と平年並であった。

b 1月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は0.1頭(前年0.1頭)であった。



<防除上注意すべき事項>

a カンシャシクイハマキの防除上注意すべき事項を参照。

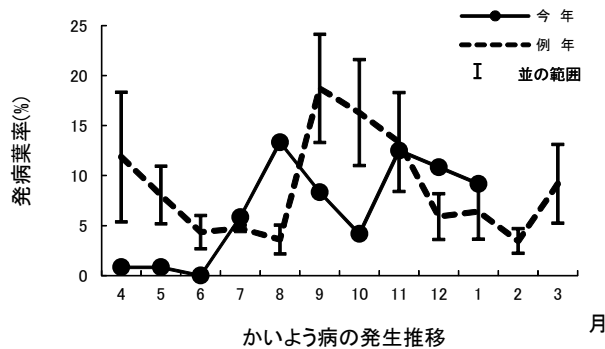
b 平成26年度病害虫発生予報第6号(平成26年8月28日付)コラム参照。

2 シークワサー

(1) かいよう病

発生程度 : やや多
予報の根拠

1月下旬の調査の結果、発病葉率は9.2%(前年3.3%、平年6.4%)と例年よりやや高かった。



<防除上注意すべき事項>

a 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。

b 春芽への感染を防ぐために、薬剤による防除を徹底する。

c ミカンハモグリガの穿孔から病原菌が侵入しやすいので、同虫の防除を徹底する。

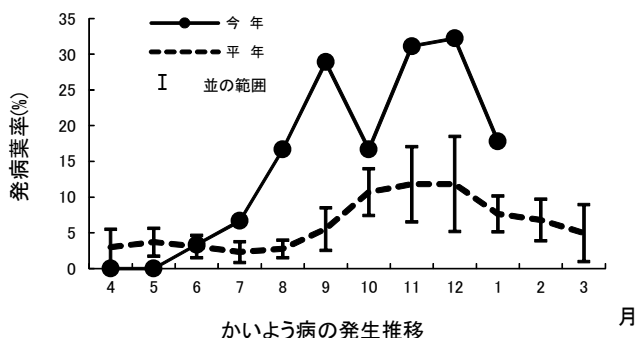
3 タンカン

(1) かいよう病

発生程度 : 多

予報の根拠

1月下旬の調査の結果、発病葉率は17.8% (前年7.8%、平年7.6%)と平年より高かった。



<防除上注意すべき事項>

- a 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。
- b 春芽への感染を防ぐために、薬剤による防除を徹底する。
- c ミカンハモグリガの穿孔から病原菌が侵入しやすいので、同虫の防除を徹底する。

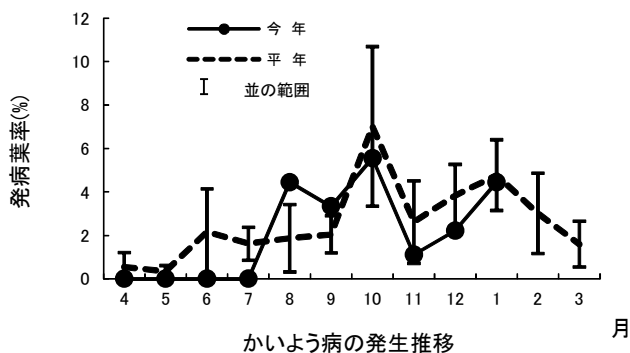
4 温州みかん

(1) かいよう病

発生程度 : 並

予報の根拠

1月下旬の調査の結果、発病葉率は4.4% (前年6.7%、平年4.8%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

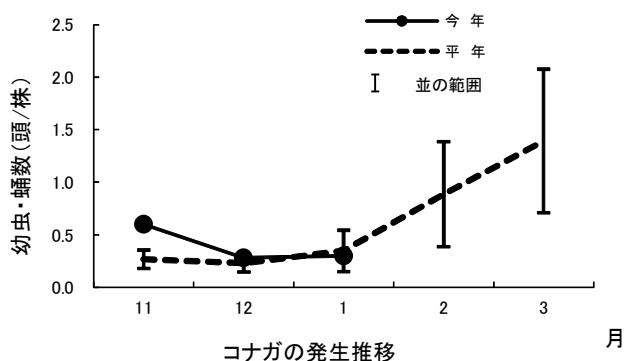
- a 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。
- b 春芽への感染を防ぐために、薬剤による防除を徹底する。
- c ミカンハモグリガの穿孔から病原菌が侵入しやすいので、同虫の防除を徹底する。

5 キャベツ

(1) コナガ

発生程度 : 並
予報の根拠

1月中旬の調査の結果、株当たり幼虫・蛹数は0.3頭(前年0.1頭以下、平年0.4頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- ほ場周辺のアブラナ科雑草の除去および収穫後の残さ処理を徹底し、ほ場管理に努める。
- 多発すると防除が困難になるので、低密度時に薬剤防除を行う。

○ 菌核病の防除対策

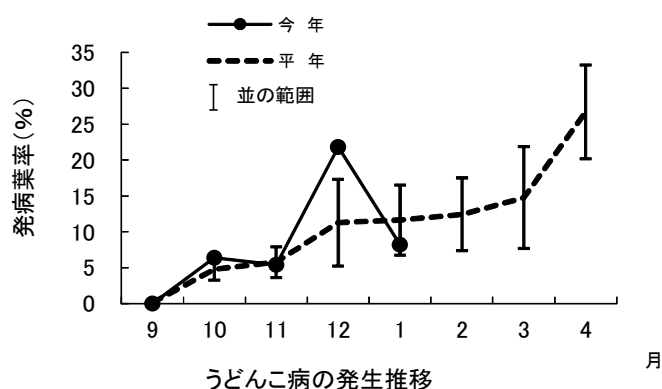
- 1月中旬の調査の結果、発病株率は0.1%(前年0%、平年1.2%)と平年並であった。
- 発病株は菌核を生じないうちに除去し、ビニール袋に入れるなどして密閉処理し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 例年発生時期に当たるので、早期防除に努める。

6 きゅうり(施設)

(1) うどんこ病

発生程度 : 並
予報の根拠

1月下旬の調査の結果、発病葉率は8.2%(前年10.4%、平年11.6%)と平年並であった。

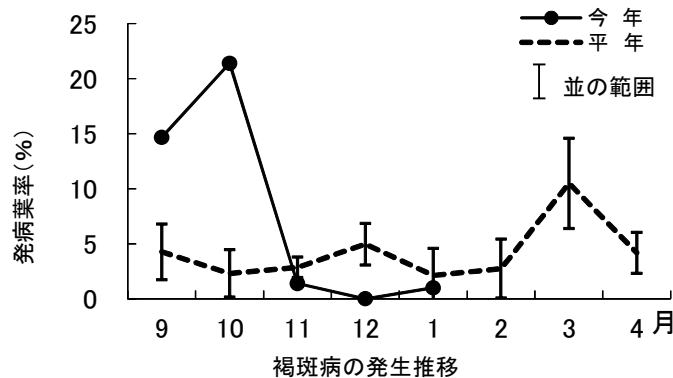


<防除上注意すべき事項>

老葉や病葉は発生源となるので、施設内に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分し、透光通風を良くする。

(2) 褐斑病
 発生程度 : 並
 予報の根拠

1月下旬の調査結果、発病葉率は1.0% (前年0.4%、平年2.1%)と平年並であった。

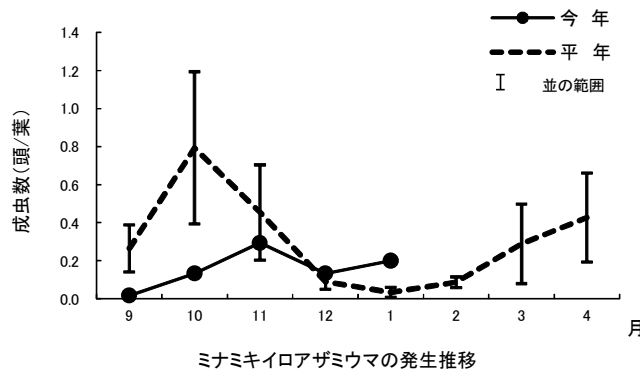


<防除上注意すべき事項>

- a 多湿にならないよう、施設内の換気に注意する。
- b 下葉の老葉を早めに除去し、施設外に持ち出し処分する。
- c 薬剤耐性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

(3) ミナミキイロアザミウマ
 発生程度 : 多
 予報の根拠

1月下旬の調査結果、葉当たり成虫数は0.2頭 (前年0頭、平年0.1頭未満)と平年より多かった。



<防除上注意すべき事項>

- a 本種は灰白色斑紋病や黄化えそ病の媒介虫である。
- b 施設周辺の雑草は本種の発生源となるので除去する。
- c 施設開口部には目合いの細かい防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。
- d 摘心や摘葉後の残さは、本種の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして密閉し、施設外に持ち出し処分する。
- e 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

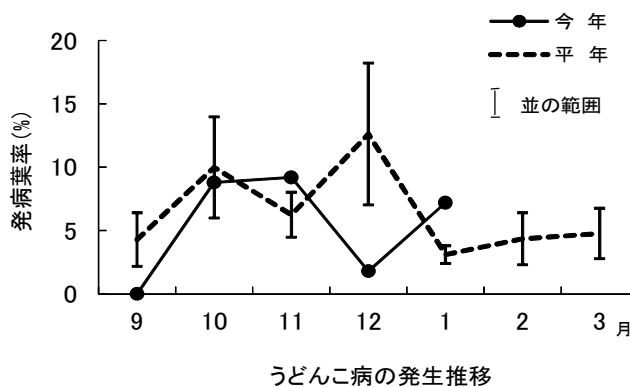
○ ハモグリバエ類の防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、寄生葉率は1.8% (前年0%、平年2.7%)と平年並であったが、一部施設で発生した。
- b 施設内外のウリ科・ナス科・マメ科などの雑草は発生源になることから、除去する。
- c 幼虫期間が比較的に短いため、葉の表面に産卵痕や食害痕がみられたら防除を開始する。
- d 農薬やその他の防除資材の効果の判定は幼虫の体色で判定する。生存時の幼虫の体色は黄色で、死亡すると黒変する。
- e 老葉や摘葉後の残さは、本種の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして密閉し、施設外に持ち出し処分する。

7 にながり(施設)

- (1) うどんこ病
 発生程度 : 多
 予報の根拠

1月下旬の調査結果、発病葉率は7.2%(前年2.2%、平年3.1%)と平年より高かった。

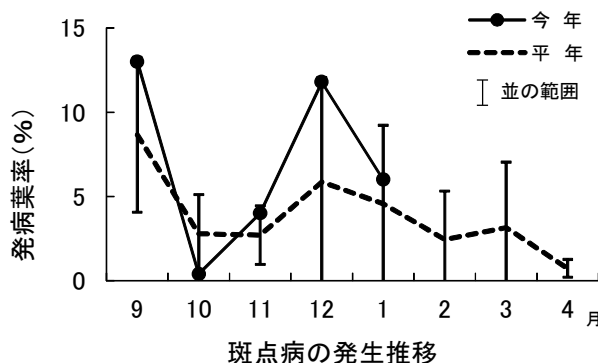


<防除上注意すべき事項>

- 発生源となる不要な老葉・下葉を除去し、透光通風をよくする。
- 除去した葉はほ場内に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分する。
- 薬剤防除は予防散布に重点をおく。

- (2) 斑点病
 発生程度 : 並
 予報の根拠

1月中旬の調査の結果、発病葉率は6.0%(前年0%、平年4.6%)と平年並であった。



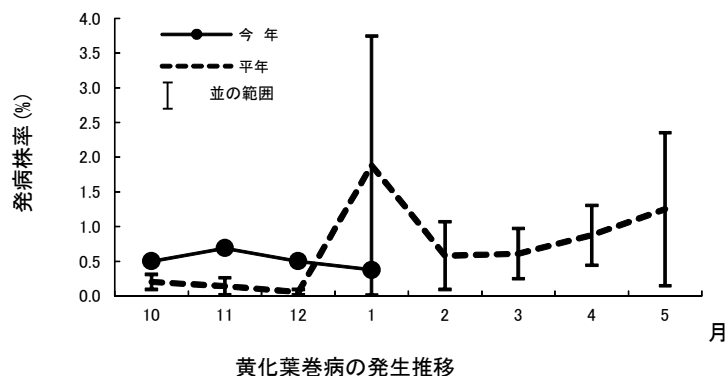
<防除上注意すべき事項>

- 老葉や病葉は発生源になるので除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- 過繁茂を避け、透光通風を良くする。
- 多湿にならないよう、施設内の換気に注意する。
- 中～下位葉をよく観察し、初期発見・初期防除に努める。

8 トマト

(1) トマト黄化葉巻病 発生程度：並 予報の根拠

1月下旬の調査の結果、発病株率は0.4%（前年0%、平年1.9%）と平年並であった。

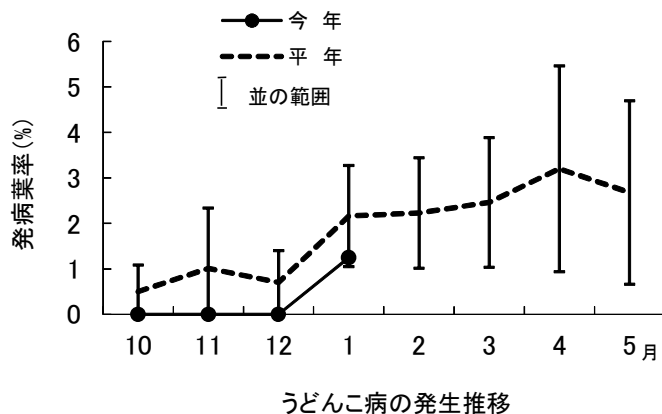


<防除上注意すべき事項>

- 発病株は感染源となるため、早急に抜き取る。抜き取った株は必ずビニール袋に入れるなどして密封し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 施設内外の野良生えトマトは、本病の感染源および媒介虫であるタバコナジラミの発生源となるので、抜き取り密封処分する。
- 黄色粘着テープ等により、タバコナジラミの早期発見・早期防除に努める。
- タバコナジラミの薬剤防除を行う場合は、マルハナバチに影響の少ない薬剤を選定する。

(2) うどんこ病 発生程度：並 予報の根拠

1月下旬の調査の結果、発病葉率は1.3%（前年0.4%、平年2.2%）と平年並であった。



<防除対策上注意すべき事項>

- 通風が悪いときに多発生しやすいので、老葉や病葉を除去し、透光通風を良くする。
- 今後、発生が増加すると考えられるので防除を徹底する。
- 多発すると防除が困難となるので、葉をよく観察し早期防除に努める。

9 小ぎく(彼岸出荷用)

○ 白さび病の防除対策

- 沖縄本島中北部、久米島の一部キクほ場で本病の発生が確認されている。
- 多湿条件下で発生するので、不要な下葉、脇芽は除去し、通風をよくする。
- 発病葉は除去し、ビニール袋に入れるなどしてほ場外に持ち出し、焼却などの処分を行う。
- 発生時期には予防散布を行うとともに、葉をよく観察し初期発生を見逃さない。
- 防除効果を高めるため、薬剤耐性菌が発現しないようローテーション散布を行う。
- 栽培終了後は近隣ほ場や次作の発生源にならないよう、不要な株は速やかに処分する。

○ ハモグリバエ類の防除対策

- a 1月の調査の結果、被害葉率は上旬0.8%、中旬1.3%(前年0%、平年0.2%)と上旬、下旬とも平年より高かった。また一部ほ場で多発生がみられた。
- b 摘葉等による残さは本種の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどしてほ場外に持ち出し処分する。
- c 多発すると防除が困難になるので、黄色粘着シート等により早期に発見し、早期防除に努める。
- d ほ場内外の雑草は本種の発生源となるので除去する。